八戸短期大学研究紀要　第30巻　一～八頁（2007）

清少納言の価値観

外崎充子

要約　「枕草子」を読んでおもしろいと思うのは清少納言独特の価値観がはっきりと見られることである。「鶯が身分の低い家に鳴き、宮中に鳴かないのはよくない」、とか、「坊主の説教は声と顔がよくなければ聞きたくない」、とか「田舎からの便りに贈り物が無いのはいただけない」など、本音がぽんぽん飛び出してくる。高い身分と深い教養、美しい容貌とすばやい機転、彼女の愛したものはどれも今の世でも価値あるものばかりであるが、現代のように自分の考えをはっきりと打ち出しにくく、本音を表わし難い世においては彼女の迷いの無い価値観がむしろ新鮮に映る。今から千年前に生きた一人の女性が、生の言葉で我々に生き生きと語りかけてくる――この事実を私は興味あることだと思う。顕示欲が強く、自慢家の女性と言われている彼女がほんとうにそうなのか、なぜそうだったのか、「枕草子」の各段に垣間見られる彼女の個性と生き方を考察し、現代の我々の価値観にも言及してみたい。

一　清原家と父・元輔

清少納言の個性や価値観、階級観はどのようにして形成されたのか。生まれた家、育った環境等、その生い立ちから考えてみたい。

清少納言は一地方官であった清原元輔の五人兄弟の末娘として生まれた。清原家は代々歌の道の名人を出した家として知られていた。曽祖父の深長父は中古三十六歌仙の一人としていくつかの勅撰集にも七十あまりの歌が選ばれており、父の元輔も梨壷の五歌仙に加えられて、三百を越える歌を残している。百人一首の中にも

深長父は

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらん

元輔は

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじとは

がそれぞれ入首されている。

清少納言自身も

夜をこめて鶏のそらねははかるとも

世に逢坂の関はゆるさじ

が採られているから一族のうち三人が百人一首に選ばれていることになる。清少納言の歌才については本人が

その人の後と言はれぬ身なりせば
今宵の歌はまずぞ詠まましし

「元輔の娘と言われる立場でなければ、今宵の歌ぐらい真っ先に詠んで見せるのに」と言っているように、清原家の伝統を意識しすぎて下手な歌は詠めないと緊張し、自信満々とはいかなかったようである。紫式部や和泉式部に較べると当意即妙のおもしろさはあるもののしっとりとした情趣や洞察の深み、ひたすらな情熱等々において、二人のライバルとはなり得なかった。血筋の才は歌才より文才に発揮されたと言えよう。

いずれにしろ、清原家は代々文芸の薫り高い家柄であった。しかし、元輔の官吏としての身分はめざましくなく、中級より少し下の階級で、六十七歳になってやっと周防の守に任ぜられ、七十九歳で肥後の守に任命されている。(清少納言は元輔が五十九歳か六十歳にもうけた子どもである。幼年時代は父に伴われて地方での生活を経験している。)

父の歌には身の不遇を嘆いたものが随所に見られる。

鶯の鳴く音ばかりぞ聞こえける春の至らぬ人の宿には

露の命もしとどまりて年経とも今年ばかりぞ春ののぞみは

我が家は春の至らぬ家、高齢の身に今年も昇進の見込みは無いだろうという嘆きを歌っている。元輔は高い位を望みつつ、それを手にすることのできなかった不遇の父であった。歌才にたけ、その道では重く用いられていただけに、己の受領階級に満足することはできなかったのである。

二　受領と受領階級

受領とはいかなるものであったのだろうか。本来の意味は「国司の交替の際新任の国司が前任者から事務を引き継ぎ、官物を受けること」であるが、後「受領する人」を指すようになり、更に「その国の政治を司る役人」を受領と呼ぶようになった。要するに朝廷から諸国に派遣されて国々の政治を司る役人のことである。当時諸国を面積、人口などによって四等級に分け、大国を第一等の国と定めていた。元輔は六十七歳で上国である周防の守に任命されている。大国でも河内、伊勢の辺なら喜んで出かけたであろうが、長崎くんだりまで赴くことは高齢の身に厳しいことであった。これとても長寿故に辛うじて得られた役職であった。

平安時代でも後期になると中央官職は藤原氏に独占されるようになり、一門以外の中小の貴族はこぞって受領職を求めるようになる。地方では徴税権によって巨富を貯えることができたから、実を尊ぶ者にはもてはやされた職だった。しかし、清少納言が宮仕えしていた頃は地方回りは辛く、厳しい仕事と思われていた。時代は少し遡るが「蜻蛉日記」には、父が受領として陸奥の国へ旅立つ箇所があり、それを作者は悲しみに満ちた筆で描いている。道中の苦しみや、任期を終えて京に到着した時の喜びなどは「土佐日記」にも見るとおりである。

しかし、反面、地方の任地を転々とすることは広い見聞を得ることであり、生き方、考え方に面白味と幅を加えることであった。高級貴族が一生を京で終え、歌なども観念と想像で作るのに較べ、受領階級の役人たちは生の生活感情を持ち、自由な発想を展開することができたのである。元輔が歌人として名を成したのも、国司としての地方回りの経験がもとになっているのではなかろうか。

三　受領階級の自由さ

受領階級の自由さについて「源氏物語」雨夜の品定めの中に次のような一節がある。

頭の中将「人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて、隠れるること多く、自然にそのけはひこよなかるべし。中の品なむ、人の心々、おのがじしの立てたる趣も見えて、わかるべきこと方々おおかるべき。下のきざみといふ際になれば、殊に耳たたずかし。」

身分が高く、立派な家柄に生まれたものは、大勢の召使にかしずかれてぐあいよく隠されることも多く、自然様子がこの上もなくよく見えるでしょう。中の品になると、人によってさまざまに気立ても違い、自分自分の特色というものを持っているところも見えますので、いろいろの点で優劣の区別のつくことが多いでしょう。一番下の品になれば、これは格別注意を払うほどのこともないです。

左馬頭「受領といひて、人の国の事にかかづらい営みて、定まりたる中にも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ。選り出でつべきころほひなり。なまなまの上達部よりも非参議の四位どもの世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざししからぬ、安らかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。」

受領といって、地方の政務に携わっている人々、これはだいだい身分が定まっています中にもまた、幾らかずつ等級がありまして、そういう中から中の品として恥ずかしくないようなものを選び出すのに都合のよい御時世です。なまなかの上達部よりは、非参議の四位の者どもで、世間の気受けもまんざらでなく、素性もいやしくないといったようなのが安楽な暮らしを立ててのんびりとふるまっているのなどはたいそう朗らかで、気持ちのよいものです。

女を身分の上から上の品、中の品、下の品と三階級に分けると、上の階級でもそれだけの値うちの無い女もいる反面、精神の働きを一番自由に見せる女は中ぐらいの階級にいるという女性論である。（左馬頭はこの後具体的に中級の女性との経験を話し、源氏もその影響を受けて受領階級の人妻・空蝉を知るようになる）

実際、この時代には多くの「精神の働きを自由に見せる女たち」が輩出した。道綱の母、清少納言、紫式部、和泉式部、孝標女、そのことごとくが受領階級に属しているのである。彼女たちはいずれも、幼い時から、あるいは結婚を機に地方での生活を経験し、後、中央で文化の薫陶を受けている。彼女たちは

第一階級（上達部）には無い、生活圏の広さと精神の自由さとを両の手に携えて一流文化圏の中に入り込んでいく。そして第一階級の文化をしっかりと身に付け、やがて凌駕していくのである。

生粋の上流人は上流であることをことさら意識しない。己れが上流であることをとりあげてものの本に書くことを思いついたりはしないものである。中流の人間が上流たらんとするところにさまざまな要因が要求されてくる。この時代、身分や容貌が容易に変えることのできないものだとすれば、変えることのできるものは人間自身の内面である。彼女たちは（とりわけ清少納言は）知識、教養、人格、美意識、機知、コミュニケーション能力……等々、身分の足りなさを補ってあまりあるほどの秀でた内面を持つことによってのみ、第一階級人と互角にわたりあえるのである。彼女たちは身分制度の貴族社会にあって、中身で勝負という恐らく人生における最もおもしろい賭けを己れに課することのできる階層の出身なのであった。

当時、女性の教養は和歌をそらんじていること、琴が上手なこと、文字がうまいことの三つだったというが、彼女たちにとってこれらを会得することはいともたやすいことであった。男しか読まない漢詩・漢籍を喜々として読み、男以上に、また、上流の貴族以上に確実に己れの内面に蓄積して言ったのである。逆に言えば彼女たちこそ、「賭け」に勝ち得る才能を持った、すばらしき女たちなのであった。

四　清少納言の受領階級観

清少納言は受領階級をどう受け止めていたのだろうか。第二十三段「すさまじきもの」の中に「除目に司得ぬ人の家」というのがある。除目（大臣以外の諸官職を任命する行事）の前日、今年は主が必ず任官されるだろうと昇進の噂を聞いて大勢の人々が集まってくる。発表の終わる暁まで知らせは今か今かと待つが、いつまで待ってもよい知らせはない。一人、二人と部屋を抜け出す者が出、ついには日ごろ義理のある人まで帰って行ってしまう。がらんとして人気のなくなってしまった家を清少納言は「いとほしうすさまじげなり」と評している。

他人の家のことのように人々の動きを描写しているが、「某の家ではこんなことがあった」という描写ではなく、「一人去り、二人去り、ついに私の家には誰もいなくなってしまった」というとらえ方である。任官されない父の有様をつぶさに見ていたからこそ書けた段であろう。実際、元輔は周防守から肥後守になるまでの十何年かは、毎年このようなわびしさ味わっていたのだ。現実の父の悲哀をまさか彼女が感じなかったはずはあるまい。利発で鋭敏な少女は父以上に切実に感じていたに違いない。「わが家はすさまじき家」「わが階級はすさまじき階級」そうまでは言い切っていないが、任官されなかった惨めさを「すさまじげなり」と断じているのである。

清少納言にとって、除目がどんなに関心あることであったか、百五十四段「ゆかしきもの」の中にも「除目のつとめて。かならず知る人のさるべきなるをりもなほきかまほし」と述べて、

除目のあくる朝は関係ない人でもどうであったか聞きたいと書いている。二十三段では心情を吐露することなく、「いとほしうすさまじげなり」と片付けているがここにも彼女流の人生観を垣間見ることができる。元来が「顔で笑って心で泣いて」という浪花節調は彼女にはないのであって、心で泣かなければならないことはスッパリと切り捨ててしまうのが彼女流のやり方なのだ。宮仕えのためなら夫も子も忘れようという心意気で出仕したのだから、この場合も嘆きの歌など作らずにさらりと公言して発散させてしまったのだろう。

そもそも「枕草子」という書物全体が弔事や政変などに言及することを避けた上に成り立っている書物であり、彼女はもっぱら上向きの姿勢で宮中や自己の「明」の部分を取り上げていっているのである。

いずれにしろ、父元輔の高い地位を得たいという悲願は彼女に歌人としての素質を与えた以上に強い人生観を与えたと思う。そしてこのことが彼女をもの書きにした最大の要因だろうと思うのである。

五　清少納言と定子中宮

「いかなる人九重をなすらむ」と憧れた宮中に、おずおずと勤めはじめた清少納言であったが、定子というたぐいまれな「位高く」「教養ある」「機知にとんだ」「美貌」の中宮にめぐりあって生き生きと輝き出し、しだいにその本領を発揮していく。「くらげの骨」「香炉峰の雪」「鶏の空音」「蘭帳の花の下」などにみるように感性と機知とを駆使して、尊敬してやまない中宮に第一番に思われるようになる。なおかつ最高級貴族たちをも手玉にとるように操って、彼女は宮中サロンの中心的存在になっていく。とりたてての「美貌」も、「身分」もない受領の娘が自らの力で階段を駆け上り、第一階級を凌駕していくのである。厳正な階層を誇る宮中に、自らの内面の実力がひたひたと浸透していく。どんなにか誇らしく、晴れがましい気分であったか想像に難くない。自慢話も自己顕示表現も書かずにはいられなかった彼女の本音であろう。

「枕草子」は嘆きも悲哀も書かなかった分、目一杯の「明」の部分を書き綴った書物なのである。

六　清少納言の価値観・上達部（かんだちめ）観

清少納言は「うらやましげなるもの」（百五十段）に言う。

やむごとなき人の、よろづの人にかしこまれ、かしづかれたまふ、見るもいとうらやまし。手よく書き、歌よく詠みて、もののをりごとにもまづとりいでらる、うらやまし。

「位高く、人にかしずかれるような人」が羨ましい人であり、「教養高く物事の折に真っ先にとりあげられるような人」が自らの理想像なのである。貴族も女官も女房も大勢いる中で、こ

とに高級貴族をさしおいて、教養ゆえに真っ先にとりたてられる――こういうとき、彼女は得意満面、日頃の意図が実現したとばかり胸の溜飲が下がる思いなのであった。

次に、清少納言の上達部（超上流階級）観を示す百二十三段「はしたなきもの」を挙げてみる。九九五年、一条天皇（定子中宮の夫）が石清水八幡へ行幸なさったことがあった。

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御桟敷のあなたに御輿とどめて御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御ありさまにてかしこまり申させ給ふが世にしらずいみじきに、まことにこぼるるばかり化粧したる顔みなあらはれて、いかに見ぐるしからむ。

一条天皇が行幸の帰り途、母上に挨拶にあがった。これほどご立派でこれほど尊いお方がかしこまって御挨拶なさるなんて……天皇を息子にもった女院の晴れがましさを思いやると清少納言は泣かずにいられない。せっかく化粧した顔もみな生地が現れて見苦しくなるのだが感涙ははしたないほど流れる。

こういうときに流す涙とはどういう性質のものだろう。雲の上の親子に対する感情だから、羨ましいとか妬ましいという感情ではないし、嬉しいという感情でもない。一条天皇の人柄、女院の人物にうたれたというのでないことは枕草子全編に二人のことを詳述していないことによってもわかる。天皇とその御国母の身分の高さに対する畏敬の念ともいうべきものか、二人を地上の幸福の権化とも見たのだろうか。彼女の身分に対する絶対的な価値観を見て取ることができる。

清少納言より五十年後に「更級日記」を著した菅原孝標女は「后の位も何にかはせむ」と「源氏物語」を読む喜びを語り、「皇后の身分も何になろう」と上人を一蹴している。清少納言と同じ受領階級の出で、宮中に仕えていながら、孝標女は宮仕えに喜びを見出すことができなかった。清少納言の人生観は菅原孝標女との比較において見たとき、いっそう鮮明に見えてくる。

なお、同じ九九五年、道隆（定子中宮の父）が逝去する。この後中宮定子の一門は凋落の途をたどることになる。しかし、枕草子は一切これらのことには触れていない。

七　清少納言と現代

清少納言は千年後の現代をあの世からどう見ているだろうか。価値観の中の一つ、「階級」について現代の一般的な定義を示して考察してみたい。橘木俊詔・森剛志は「日本のお金持ち研究」の中で次のように定義している。

「階級」とは所得、生活水準、教育、職業、地位、政治思想、生産要素の保有状況、文化資本の程度等々の社会経済にまつわる変数で人々を区別したときに、同一の特色を共有する人たちの集まりである。

身分を表わす貴族階級は第二次世界大戦後ほぼ消滅し、現代は「所得」が階級付けの第一番に上がってきている。上流階級は今も厳然と存在するが、多様さを増した現代の階級の定義は難しくなってきていると思われる。人によっては高い所得を得

ている人を上流階級とみなすかもしれないし、また、別の人は高い所得を得ていなくても社会・経済を支配している人、いわゆるパワーエリートを上流階級とみなすかもしれない。清少納言の愛した教養人（知識、教養、人格、美意識、機知、コミュニケーション能力……）や高学歴者は必ずしも上流階級に入っているわけではない。所得と教養・学歴は以前ほど相関しなくなっている。橘木俊詔・森剛志は「上流」の意味は不明確になったとし、「大企業の経営者、特にオーナー企業者は、所得、権力、支配力のすべてを兼ね備えた上流階級とみなすことが可能である」と述べている。

「枕草子」の中には所得や経済を表わす記述は殆ど無い。この時代の貴族というのは地方に荘園という領有地を持つ不労所得者だったから、経済への関心は薄かったものと思われる。この点、平安の上流貴族と現代の上流階級との隔たりは大きい。前述の現代の上流階級の定義の中で貴族に当てはまるのは「教育」と「地位」の二つに過ぎない。そして、まさに、この二つこそが清少納言がこだわったものだったのだ。「地位」は変えることのできないものだから、清少納言にとって「教育」こそが宮中で生きるよりどころだったのではあるまいか。彼女は父・元輔が果たせなかった地位への望みを自らの教養、美意識、機知によって成し遂げたのである。それを受け入れる柔らかな地盤が平安貴族の中にあったということであろう。私にとってこのことは今回大きな発見であった。

今様清少納言は現代にも多数存在している。自らに課した「賭け」を一つ一つ手中にしていく喜び、その過程での人との出会い、日々の営みの中のあまたの発見、それらを記述するきらめく感性、どれをとっても、みな現代でも価値のあるものばかりである。「所得より美貌より、学歴地位よりもっと価値のあるものがあるよ」「もっと明るくもっとおもしろく生きよ」と千年前のあの世から我々にエールを送っている。

清少納言略伝

清少納言の祖先は天武天皇にさかのぼる。曽祖父の清原深養父も、父の元輔も歌人として有名であった。幼い時から漢詩、漢文を父に学び、才智に長けたことで評判の彼女は橘則光に嫁いで則長という一子を得たが、別れて、中宮定子に仕えた。

定子は中関白家と言われた藤原道隆の娘で、四歳年下の一条天皇の後宮に入った。当時は、皇室の外戚になるために藤原氏の上層の貴族たちは争って娘を宮中に送り、その周辺に才学のある女房を集めたのである。

定子もまた、才色兼備のすぐれた人であったが、清少納言の機知にあふれた応対も多くの公卿たちの人気の的であった。「枕草子」は宮中生活で見聞きしたことや歌枕や、防備録のようなものをまとめたもので、その鋭い美意識を洗練された文体と、詩情溢れる描写であらわし、随筆文学として独自なものである。

（「人物日本の女性史」より）

参考文献

「清少納言」萩野敦子　勉誠出版
「人物日本の女性史」㈱華麗なる宮廷才女　円地文子監修　集英社
「日本のお金持ち研究」橘木俊詔・森剛志　日経ビジネス人文庫